

なんてりっぱな青年になったこと。

K君は現在日大の三年生。B君は医学の道をめざして奮闘中とのこと。食べて飲んで、話はやっぱり小学生時代の思い出に集中する。

海の家での宿泊。夜中にこっそり食べたとうもろこし。次の日は、腹痛と下痢のため水泳禁止。「今でも、トウモロコシを見ると必ず思い出します」と、笑うK君。

校庭の除草作業中、へびを追いかけ、その罰として、へびに関する論文?を提出させられたというB君。「あれ以来、妙にへびが好きになって」と苦笑する。当然のことながら、「先生にもずいぶんしかられたなあ」ということばのなんと多いこと。

「そんなにしかつたかなあ。やさしかったんじゃないの」

「いやいや相当なものでしたよ。でも先生のしかり方は雷雨型でしたから」

雷雨型。うまい表現である。おそらく落雷の意味も含めてのことであろう。

それにしても、彼らの記憶は実にみずみずしく、しかも適切なことばで、思い出を生き生きと再現するのである。教師のちよつとした言動、はては服装や化粧にいたるまで実によく観察している。相手が子どもだからといって、決していいかげんに接することはできない。と、こんなことは、ずっと以前からわかっていたつもりだったが。

さりげない教師のことばで、自信を

つけたり、反対に自信を失ったりすることも多いはず。しかもそれが、一生を左右することになったら……。「ああ、おなかいっぱい。先生の料理最高」

「こんどは、早めに連絡してね。もつとうまいもの作っておくから」

十時近くになって、K君とB君は帰って行った。

「お正月ごろ、クラス会を開きたいので、その時はぜひ……。」

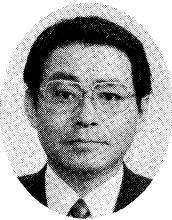
と、いい残して。

こんどは、どんな思い出が語られるのであろうか。楽しみである。

(猪苗代町立長瀬小学校教諭)

ふくろうの目

大森 俊 輔



魚の目の位置はおもしろい。ほとんどの魚が鯛のように両側に目をつけている。しかし、平目やかれのいのように片側にふたつ寄りそうように並んで

るものもある。砂にべたつとはりつきふたつの目で上の方を見上げる。自分の身を守るためとはいいいながら、じつにうまいしくみになっているものだ。鳥の目の位置もおもしろい。鶏のように両側に目がついている鳥はどのようにものが見えるのだろうか。視野が広くなりすぎて困りはしないか、そんなことまで考えてしまう。

変わったところに目がついている鳥もいる。ふくろうの目がそれだ。他の鳥にくらべて異様な程に大きい顔、そこに、ふたつの目が人間のようになんぞいる。ふくろうは、保護色をして自分の身を守ろうとしている動物でも、高いところからひとめでそれを見つけないことができるという。目が人間のようになんぞ前にふたつならんでいるため、立体的なものを見ることができからなのだろう。

ふくろうといえば、鼻めがねをかけたふさの下がついている角帽をかぶり、ガウンを身につけた姿が目にかんてくる。外国ではふくろうを智慧の神様として見ると聞いたことがある。立体的なものを見、とらえ、判断をする。そのような目をふくろうが持っているたぬなのだろうか。

私の担任した子どもの中にK君がいる。忘れ物の常習犯、そして、身だしなみなどにはいっこう無頓着。書いた文字から内容を読み取るまでにはかなりの習練を要する。このK君が四年生の時にこんな日記を書いてきた。

とうめい人間がもしいたら、ぼくのあとをこっそりついてくるだろうなあと思った。立ちしよんべんしたかったけれど、気どってトイレでした。えりをきちつとして自転車に乗って学校に遊びに行った。

とうめい人間は、今、日記を書いている僕の近くにいるかもしれない。もういちど、とうめい人間にお礼をして、おやすみをいってから寝ることにはしよう。

ぐずで、だらしないと思いいこんでいたK君の日記がこれだ。他人をごまかすことはできない。K君はもうひとりの自分の存在に気づいている。それが、立ちしよんべんをしたかったK君をトイレに行かせたものになつていっているのだらう。K君は「思い込み」で子どもを指導しがちな私にとっての先生である。

私たちは、ふくろうと同じ位置に目がある。立体的なものを見たり、とらえたり、考えたりする力をフルに生かしていききたいと思う。その訓練を、今しておかないと、しまいには鶏のように、目の位置が両側に移ってしまうような気がするから。

(いわき市立差塩小学校教諭)